

沖縄平和行進に参加して

日本海地方伏木支部
北陸日本海油送分会
飯沼 圭大

このたび、労働組合の代表として5. 15沖縄平和行進に参加する機会をいただき、心より感謝申し上げます。41歳という節目の年に、組合員を代表して現地に足を運び、沖縄の歴史と現状を自分の目で確かめることができたことは、私にとって大きな責務であり、同時に貴重な学びの時間となりました。

初日は全国結団式に参加し、沖縄戦の実相や戦後の基地問題、そして平和運動の歩みについて講話を受けました。講師の方々が語る沖縄の現状は、報道や資料で知るものとは比べものにならないほど切実で、胸に迫るものでした。

嘉手納基地コースの行進では、基地のフェンス越しに広がる滑走路と、そのすぐ隣にある住宅地の光景に衝撃を受けました。戦闘機が頭上を通過するたびに、身体に響くほどの爆音が鳴り響き、会話もできないほどでした。この環境の中で日常生活を送る住民の方々の苦労を思うと、胸が締めつけられる思いでした。過去には住宅地への墜落事故も起きており、「もし自分の家族がこの場所で暮らしていたら」と想像すると、基地の危険性を決して他人事として扱うことはできませんでした。

平和記念公園やひめゆり資料館の見学では、沖縄戦で犠牲となった多くの方々の遺影や証言に触れました。特に、ひめゆり学徒隊の少女たちが置かれた過酷な状況を知り、同年代の子どもを持つ親として、胸が痛む思いでした。戦争が奪ったものの大きさ、そして二度と同じ悲劇を繰り返してはならないという強い思いが湧き上がりました。

行進中、沿道の住民の方々が「ありがとう」「頑張っつね」と声をかけてくださる場面がありました。その笑顔の裏にある長年の苦労や思いを想像すると、沖縄の現状を本土の私たちがもっと真剣に受け止めなければならないと痛感しました。労働組合として、平和と人権を守る活動が続けることの重要性を改めて実感しました。

今回の平和行進を通じて、「歩いて知る沖縄」という言葉の意味を深く理解しました。基地のない沖縄、そして平和な日本を実現するためには、まず現実を知り、学び、そして行動することが必要です。平和行進はその第一歩であり、参加者一人ひとりの思いが積み重なることで、大きな力となっていくと確信しました。

今回の経験は、私自身の問題意識を大きく変えるものでした。平和は与えられるものではなく、守り続ける努力が必要であることを強く感じました。今後は、今回得た学びを組合内外に伝え、平和で安全な社会の実現に向けて、今後も取り組みを続けていく決意です。